

# 全国草原再生 ネットワーク

草原がつなぐ、人・自然・文化

ニュースレターvol.7 (Jul., 2011)

<発行>全国草原再生ネットワーク  
<http://www.sogen-net.jp/>



## ■全国草原再生ネットワーク総会の報告

### ◇第5回総会が開催されました！

去る6月11日、東京日本橋で、全国草原再生ネットワークの第5回総会が開催されました。2010年度事業として、「草原サミットがもたらしたもの」の発行と、草原データベースの整備と部分公開が達成できたこと、370件の草原文献情報の収集と公開、メーリングリストの運用、ニュースレターの発行、各種資料の発送、ホームページの運営などが報告されました。会員数も、個人会員が46、団体会員が11となりました。2011年度もこれら事業を進めるとともに、ネットワークとして資料収集・整理を進めることが確認されました。この他に、広島県北広島町で2009年に開催された第8回に続き、第9回のサミットは群馬県みなかみ町で開催されることになりました。開催日程も2012年10月の第3または第4の土日とするそうです。みなかみ町からも担当者に出席いただき、心強い思いでした。

閉会後には、2題の事例紹介を頂きました。1題目には、一般社団法人日本茅葺き文化協会の上野弥智代さんが、「日本茅葺き文化協会の取り組み」として、東日本大震災後に協会として取り組まれた事例についてご紹介いただきました。福島県では、仮設住宅の一部に、国産スギ材を使った板倉構法が採用されています。その断熱材として、富士山麓で採取されたススキが使われているそうです。ススキの断熱材でも県の断熱基準を満たすことが確認され、施行も簡単、何より解体の際にもゴミが出ないというメリットがあります。被災後にも本当に大事なことを考える必要があると思い知らされました。もう1

題は、東京芸術大学客員教授の日塔和彦さんが、「英国の茅葺き建造物とハンガリーの茅場」と題して講演くださいました。イギリスでは首都ロンドン近郊にも多くの茅葺き建築物があるそうです。驚いたのは、ロンドン市内のシェイクスピア・グローブ座という劇場では、木造の大ホールの屋根が茅葺きだということです。イギリスでは麦わらが使われ、茅を葺き替えるのではなく、葺き足すので、屋根を掘ると古い茅材が出てくるそうです。その中には、今では使われなくなった品種もあり、復元の取り組みなどもあるそうです。茅葺き屋根は、古い過去ではなく、今も新たな、最先端の文化を育てている、ということが感じられました。

東日本大震災で被害に遭われた方、またそのご家族の方は、今もたいへんな苦勞をされていることと思います。そんな中、こうして総会を開催し、情報提供を頂くことで、草原の恵みを活かしながらできること、やらなければならないことがある、ということが実感できました。



(事務局)

◇イギリスの茅葺き風景

今回のイギリス旅行は茅葺き見学を目的としたものではなく、「英国古民家再生事情視察の旅」と題して英国留学中（ケンブリッジ大学）のモリス千葉大学教授（建築史）を訪ね、英国での古民家再生の実例を見せていただくことであった。数多くの再生した古民家の内外を見学させていただいたほか、保存されている伝統的集落も案内していただいた。結果として、田舎の古い民家は茅葺きが多く、車内からの見学を含めれば、1000棟程度の茅葺き建物を見たことになった。

旅行は千葉大学で非常勤講師を勤めている私が企画し、7人でレンタカー2台を利用して2010年7月に10日間にわたり、いわゆる大グリーンベルト地帯を巡った。大グリーンベルト地帯とは、ロンドンを中心に半径100～150km範囲で取り囲む農村地帯で、多くの古い集落や牧場などの産業革命以前の姿を色濃く残しており、日本人にも人気のコッツウォルズ地方は中世の姿が残っていることで知られている。

■イーストアングリア地方

行程に従ってみていくと、日程の前半はモリス先

生の案内で、イーストアングリア地方を見て回った。ケンブリッジ州を中心として18か所の再生民家を含む町並みや集落を見学した。この地方は緩やかな丘陵地帯で、たとえばケンブリッジ市内からほんの5分も車で走れば、茅葺き民家が多く残る古集落がいくつも見ることができる。平瓦板葺きの町中を別にして多くは木造の茅（葦）葺きで、外壁は大壁となっていて内部に入らないと木造であることがわからない。

ここで興味深かったのは、道路の両側に広い公共緑地を設けたグリーンビレッジで、その外側に茅葺き民家が立ち並んでいる風景であった。ケンブリッジ市郊外のBarrington村で、この中世的村落形態を保っている村がこの他にもいくつかあるという。

■ノーザンプトン地方

後半の5日間は私たちだけで見学した。最初はケンブリッジ市西方に位置するノーザンプトン市を中心とする地域で、ここは11年前に「欧州茅葺き技術」研修で訪れたところでもある。この時もずいぶん茅葺き民家が多いなと感じたが、今回はほとんど茅葺きだけのかかなり大規模な集落Wroxtton村を見



イーストアングリア地方 グリーンビレッジ



ノーザンプトン地方 Wroxtton 村



コッツウォルズ地方 アン・ハサウェイの家



コッツウォルズ地方 Welford on Avon 村



ウェスト地方 Sandy Lane 村茅葺き教会堂



サウスウェスト地方 Avon 川沿い上流 Haxton 村



サウスウェスト地方 Avon 川沿い下流 Upper Woodford 村風景



サウス地方 Chichester Bosham 港ボッシュム

ることができた。近くの Drsyton 村を併せれば 60 棟はあったろう。民家の構造は赤みの強いライトストーン（砂岩）の石積みで、これに木造の小屋を組んで茅（葦）を葺いている。

#### ■コッツウォルズ地方

さらに西側に広がる広い地域で、日本人はもとより世界的にも知られた観光地となっている。ほとんど日本に知られていないイーストアングリア地方とは異なって、どこに行っても観光客であふれている。

この地方で有名な古い町並みは数多くあって、それらはライトストーンを主とする石造の造りで、屋根材は石葺き（砂岩・石灰岩）である。しかし、農村地帯の集落には茅葺きも多くみられ、構造は木造である。よく知られているのは、ストラットフォード・アポン・エイボン市の郊外にあるアン・ハザウェイ（シェクスピアの妻）の家で、木造茅葺きの 16 世紀に建てられた古民家である。さらにエイボン川沿いに西へ下ると Welford on Avon 村があり、川畔には古い教会堂を中心に 10 棟ほどの木造茅葺きが並んでいる。各家々はきれいに手入れがなされ、まるで幼いときに絵本で見たとおりの風景である。

#### ■ウェスト地方

この地方名称は正確ではないが、コッツウォルズの南側、バース市の東側にあたる地域である。この地方にも古い町並みがところどころにあるが、訪れる人は少ない。ここでは街道筋にある茅（麦藁）葺き集落 Sandy Lane 村を訪ねた。かなり交通量の多い道路の両側に建つ民家約 20 棟はすべて茅葺きで、村外れには茅葺きの教会堂もある。普段は見向きもされないのに、日本人が興味をもって見学しているのに感激した住民が、建物の丁寧な説明をしてれた。住み手は茅葺きの古民家に誇りを持っていて、多額の費用が必要であるが、頑張って維持していくとの決意が読み取れた。

#### ■サウスウェスト地方

有名なストーンヘンジを含む地域で、ヘンジ西側のエイボン川（コッツウォルズのエイボン川とは異なる）沿いに約 30 km にわたって古街道がサリスベリーまで続く。この道沿いは茅（麦藁）葺き民家が濃く分布し、また、古い佇まいの川畔の風景と相まって、まるで幼い時期の記憶に残る 60 年前の山形の田舎を思い起こさせる。

#### ■サウス地方

イギリス海峡に面する古い港町ボッシュムで、今

回の旅を終えた。港町なので期待はしていなかったが、宿泊する予定の小さなホテルを探していたら古い茅（麦藁）葺き民家が続く一帯があり、この中に目的のホテルがあることに気が付かず町並みを見学していた。早朝に港を散歩すると、まるで絵画にあるような色とりどりのヨットが係留され、それと茅葺きの民家がたたずむ景観には息をのむものがあった。この地方も木造が多いが、外壁は煉瓦壁などで覆われていて外観からは木造であることがわからない。

この地方には、民家の保存で定評のあるシングルTON野外博物館のほか、サウス地方一帯に古い茅葺き集落が点在しているが、日本には全く紹介されていない。

### ■最後に

7月のイギリスは日中が長く、朝6時から夕9時近くまでは活動できる。このため、実質7日間のレンタカーを利用した旅ではあったが、数多くの田舎の町や集落を訪ねることができた。その中からここ

では茅葺きを中心に報告したが、そこには日本と全く異なる風景が目前に広がっていた。広々とした小麦畑や牧草地・森林がなだらかな丘陵地に展開し、その中に溶け込むようにして集落が佇んでいる。工場も一か所で見つただけで、視界を横切る送電線もほとんどみられない。

今回旅行した環状の大グリーンベルト地帯は、産業革命による自然破壊の反省から100年以上の歴史を持つ開発規制の地域と聞いている。高速道路網により、ロンドンまでは1時間程度で通勤可能な地域でもある。数多くの古民家居住者にもお会いし、内部も見学させていただいたが、そこで感じられたのは古民家に住んでいることに誇りを持っていること、家はきれいに手入れがなされて丁寧な生活を送っていること、またかなり生活に余裕のある知識人や中層階級の所有であることにも気が付いた。

(日塔 和彦 (にっとう かずひこ)  
・東京芸大客員教授)

## ■各地からの報告

### ◇上ノ原のカヤが被災地仮設住宅の断熱材に！

2011年7月7日の七夕は、記念すべき日になりました。昨秋刈り取って、諏訪神社屋根替え用に藤原区に寄贈しストックされていたカヤ366束が、4トン車1台に積みこまれて東日本大震災被災地いわき市民の皆さま用仮設住宅建設地に向かいました。カヤは日本茅葺き文化協会を通じて、国産スギ材による板倉構法で仮設住宅建設中の佐久間建設工業に寄贈され、7月末までに住宅20戸の屋根用断熱材として活用されることになったのです(写真①、写真②)。

6月11日開催された全国草原再生ネットワークでご面識を得た茅葺文化協会の上野弥智代理事から、「断熱材用のカヤが足りなくなって困っているが、森林塾青水で何とか融通していただけますか」とのお電話をいただいたのは6月14日のことでした。まずは、旅先の徳島から町田社長に電話でカヤの保管場所を確認。帰宅後、18日～20日の3日間で地元藤原に出向き、区長、諏訪神社屋根替え実行委員会や氏子総代、みなかみ町役場関係各位に事の次第を報告、被災地のために供出することにつき気持ち



写真① 倉庫の中の茅ポッチ



写真② トラックに積み込まれた状態

よくご了解をいただきました。

7月7日には、建設予定地・会津若松より4トン車を駆って屈強の会津男児2名が来られ、上野理事ならびに町役場の木村マネージャー、藤原区代表の吉野一幸さん、中島真人さんが立ち会い、小生も含め7名で積み込み作業をしました。蒸し暑い日中でしたが、意気を感じてやっていたので気持ちよく作業を終えることが出来ました(写真③、写真④)。

これで、上ノ原のカヤの用途がまた一つ増えることになりました。これまでの文化財建造物の屋根材、この夏に予定している野菜・果物のマルチ材と肥料。

そして、このたびの断熱材。ご縁を取り持っていただいた草原再生ネットワーク、お声掛けをいただいた茅葺文化協会・上野理事、快くご理解ご協力いただいた藤原区ならびにみなかみ町役場の皆さまのお陰さまのこと。この場をかりて、厚く感謝申し上げます。

そして、藤原区の皆さまへ。10月には、今回供出いただいた366束以上を必ずお返しいたします！

(森林塾青水)



写真③ 積み込み作業



写真④ 作業終了後の記念撮影

### ◇皿ヶ峰 —高知市街地を間近に臨む草原の山—

皿ヶ峰は高知県高知市街地南部に位置する標高163mのドーム状の小高い山である。草原域の面積は約15haで、頂上に登ると360度の視界が広がり、東には浦戸湾と五台山(牧野植物園と竹林寺のある山)、北には高知城を中心に高知市の中心街を間近に見降ろすことができる。見晴らしの良い眺望を楽しめるということも手伝って、市民の散策コースとしても人気が高く、登山道も良く整備されている。

梅雨のただ中の去る6月16日、全国草原再生ネットワークの高橋会長をはじめ、草原研究会の皆さんに遠く高知までお越しいただき、皿ヶ峰を案内することができた。皆さん一様に、高知市街地のすぐ近くに素晴らしい草原の山があることに驚いておられた。

では、なぜ高知市のような人口30万人を超える市街地の近くに草原の山が残ったのであろうか？





1980年頃までは、採草地として広く利用され、一部ではヤギも放牧されていた。一方で古くから墓地としても利用されており、いまでも多くの墓地が点在している。山を歩く人だけでなく、墓参りに訪れる人も多い。墓の周りの草を刈って焼く人もいて、火の気も少なくない。実は、皿ヶ峰が現在でも草原景観を保っていられるのは、数年に一度、失火によって山火事が発生するからなのである。最近では2005年と2009年に山火事が発生し、草原域の多くが焼けた。ただし、市街地に隣接していて消火活動も迅速なため、焼け残る部分も多く、そのような場所ではコナラ、ハゼノキ、アカメガシワなどの木本類の優占する群落に遷移している。草原の優占種も変化しており、1980年以前はススキ優占群落が広く成立していたようであるが、現在ではネザサの優占群落が卓越している。

皿ヶ峰の草原域で現在までに確認されている維管束植物の種数は約350種である。そのうち、環境省あるいは高知県指定の絶滅危惧種および準絶滅危惧種は21種を数える。皿ヶ峰を構成する母岩は主に古生層のチャートで、ところどころに基岩が露出し、土壌の堆積の少ない場所が南斜面を中心に広がっている。そのような場所では、ネザサの優占度が低く、ダイサギソウ、ホソバヒメトラノオ、ウンヌケモドキなど多くの草原生絶滅危惧植物が出現する。一方、斜面のところどころから湧いた水によって湿性な立地が形成されており、高知県では稀なミズオトギリやタムラソウなどを確認できる。このように皿ヶ峰は、市街地に囲まれながらも豊かな植物相を維持してきた極めてめずらしい草原の山である。しかし、数年に一度発生する山火事に依存しているだけでは草原域が縮小してしまうことは明らかである。その

ような現状に危機感を持った市民を中心に、県立牧野植物園と高知大学が連携して、草原を維持していくための活動を開始した。今後、高知市の担当部局とも連携しながら、広く市民の活動として草原を維持する活動を定着させていきたい。草原研究会の皆さんのお知恵をお貸しいただきたいと願っている。

(石川慎吾:高知大学理学部)



ダイサギソウ



ホソバヒメトラノオ

◇山地酪農のルーツ斉藤牧場を訪れました

高知の視察の2日目、皿が峯の視察の翌日は、高知市白木谷の斉藤陽一さんを訪ねた。この放牧場は、山地酪農と呼ばれる酪農経営のルーツとしてよく知られている。山地酪農とは、野草飼料を主体とした低投入持続型の酪農経営を指す。高知はその発祥の地でもある。一般の酪農経営では、輸入した濃厚飼料と造成した草地から粗飼料を得て牛乳を生み出すが、山地酪農では、牛の力で草地を開墾し、自生する野草を主な飼料とするため、草地の開墾や播種、施肥などが不要だけでなく、海外からの飼料輸入も最小限に抑えることができる。だからこそ、低投入であり、持続的なのである。

私は、この経営に魅せられて、過去20年間以上に渡って何度もこの牧場を訪れてきたが、今回、草原の研究者の方とともに見ている中でいくつかの発見や再認識をさせて頂いた。

その1つは、放牧地の持続性である。斉藤牧場は1968年に放牧が開始されている。その歴史は今年で半世紀に近い。長い年月が経過しているはずなのに、その景観は昔とそう変わらない。写真1は1994年に撮影したものであるが、林がやや減って草地が拡大した他は、今年の写真と大きく変わることはない(写真2)。半世紀にわたって、営々と放牧を続け



写真1 1994年の様子



写真2 2011年の様子(本報告)

てきた山地酪農の営みの安定性は、水田がもつ力強い持続性を思い起こさせる。

2 つめは、シバ植生の変化である。景観は大きな変化がないとはいえ、草地の植生には少なからぬ変化が生じているようである。かつて、牛の採草や踏みつけをくぐり抜けて残った日本シバはこの牧場の優占種であったが、今回の調査では暖地型シバとされるセンチピート(ムカデシバ)がそれに代わって優占種となっている。気候変動に加えて、少量ではあるが牧場外から持ち込まれる飼料による熟畑化によるものらしい。



センチピート(ムカデシバ)

3 つめは、稀少種の存在である。視察前は、放牧地では稀少種の発見はむずかしいだろうとの予想を覆して、高知県で絶滅危惧種とされているカンサイタンポポが多数発見された。斉藤牧場は、これまでの持続的な牧場としてだけでなく、稀少な植物を育む農場としてさらに価値を高めたことになる。

とはいえ、経済学を専攻する私にとって植物の何が稀少で何がオモシロイのか理解するのは難しい。斉藤牧場にあたかも放牧牛のように散らばり、喜々として草地にへばりついているみなさんの姿は、相変わらず謎のままである。



(飯國芳明)

## ■書籍紹介

### ◇「蝶からのメッセージ 地球環境をみつめよう」

本書は、日本でもっともチョウの種類数が多いとされる長野県から、様々な側面から執筆されています。半自然草原のチョウの危機と保全への取り組みも多数紹介されています。草原の保全、活用にかかわる方にも大変ためになる書籍です。

著者：中村寛志・江田慧子編

出版社：信州大学山岳科学総合研究所

¥980 (税込) ISBN：978-4-904570-34-0 C0045

＜はじめに＞チョウを通じて環境保全の意識を育む 中村寛志

＜様々な環境に住むチョウ＞

- 1 富士山に生息するチョウ類 北原正彦
- 2 高山チョウとモニ1000 中村寛志
- 3 ロシア沿海地方のチョウたち 四方圭一郎

＜環境指標種としてのチョウ＞

- 4 温暖化とチョウ 井原道夫
- 5 チョウ類群集による環境評価 中村寛志

＜絶滅に瀕しているチョウ＞

6 里山のチョウ類の変化 浜栄一

7 松本平の歴史とオオルリシジミ 丸山潔

8 半自然草原とチョウ 須賀丈

＜チョウを守る＞

9 浅間山系でのミヤマシロチョウ保護活動 清水敏道

10 東御市におけるオオルリシジミの復活 西尾規孝

11 オオルリシジミと野焼き 江田慧子

12 ミヤマシジミの保護回復活動 江田慧子

13 治水事業における生物との共存の試み 田下昌志

＜あとがき＞チョウからのメッセージを社会に伝える役割 江田慧子



(事務局)

## ■草原をめぐる動き (2011年7月～10月)

7/30 千町原夏の草刈り！ (場所：千町原 (広島県北広島町)、連絡先：高原の自然館 0826-36-2008)

7/30-31 茅葺き技術伝承の公開講座～第2回目 (場所：旧福島邸 (石川県輪島市三井町)、連絡先：石川県茅葺き文化研究会)

8/6-8 ススキの青刈り (場所：上ノ原 (群馬県みなかみ町藤原)、連絡先：森林塾青水)

8/7 マルハナバチ調べ隊 (場所：乙女高原 (山梨県山梨市牧丘町)、連絡先：乙女高原ファンクラブ)

8/21 乙女高原を歩こう (場所：乙女高原 (山梨県山梨市牧丘町)、連絡先：乙女高原ファンクラブ)

9/19 秋吉台お花畑プロジェクト2 (場所：秋吉台 (山口県美祢市)、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト)

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

## 全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol.7 2011年7月号

全国草原再生ネットワーク事務局

694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】ネットワークの総会が、記念すべき5回目を迎えました。今回の総会の特筆すべき点は、節目を迎えただけでなく、会を契機とした縁がもとで、草原で刈られた茅が震災地で利用されたこともあると思います。まさに本ネットワークが目指す、草原に係わる人たちのつながりがなせた成果といえるのではないのでしょうか。